

Phase and Ellipsis: A Minimalistic Analysis of Silent Structures

高木, 留美

<https://hdl.handle.net/2324/2235995>

出版情報 : 九州大学, 2018, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

氏 名 : 高木 留美

論 文 名 : Phase and Ellipsis: A Minimalistic Analysis of Silent Structures
(フェイズと省略: 極小主義に基づく省略構造の分析)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英語の省略構文を中心に、生成文法理論におけるフェイズ理論に基づいて省略現象の統語的認可条件について考察し、省略現象の文法的特徴に原理的な説明を与えることをねらいとした。また、本分析は、省略領域が常に主要部の補部に対して行われるという統語的特徴への根本的説明を提示し、長年省略構文の研究において未決の問題であり中心的関心事であった主要部移動と省略の相互的關係についても説明することができるということを実証した。

(以下、本論文では省略現象が音韻的削除により派生すると想定するため、「省略」ではなく「削除」という用語を用いる。)

本論文の第1章では、削除位置はフェイズ主要部の補部に対してのみ行うことが可能だという近年の提案に対し、動詞句削除を例に挙げ、経験的に非フェイズ主要部の補部の削除も可能であることを示した。また、分析の対象とする構文の統語的特徴、および関連する諸現象についても述べた。

第2章では、4つの先行研究を概観した。初めに、省略現象の統一的研究として現在でも影響力のある Lobeck (1995)と Merchant (2001, 2004, 2008, 2013)を挙げ、主に経験的問題を指摘した。その後、フェイズ理論の枠組みに基づいた研究である Aelbrecht (2010)および Goto (2011)を概観し、理論的および経験的問題を挙げた。

第3章では、本論文の基礎を成す理論的想定を導入した。主な理論的枠組みとしては、Chomsky (2007, 2008)の素性継承理論、および Chomsky (2013, 2015)のラベリング理論の一部を採用した。また、統語論における削除領域の決定は Merchant (2001)の提案する E 素性により行われると想定した。

この想定をもとに、第4章では、本論文における提案を行った。まず初めに、E 素性の継承が義務的に生じると提案する Goto (2011)とは異なり、E 素性の素性継承が選択的に生じる事が可能であると提案することで、フェイズ主要部の補部の削除だけではなく、非主要部の補部の削除も捉えることができると主張した。その後、実際の認可条件として、焦点要素が削除認可に関与していることを示唆した。しかしながら、焦点要素のみでは不十分であり、認可には指定

部-主要部間の素性照合、または主要部間での統語的選択関係も要請されることを論じた。これらを踏まえ、E素性は、E素性を持つ主要部と、その主要部の指定部位置にある焦点要素、または、その主要部と選択的關係にある焦点を持つ主要部により認可が行われることを提案した。

第5章では、本分析が他の様々な削除現象を適切に捉えることができることを実証した。

第6章では、まず初めに、なぜ削除は主要部の補部に対して行われるのかという問題に対し、van Craenenbroeck (2004)のフェイズのみがその補部を削除する能力を持つという提案を挙げ、理論的に、フェイズ主要部の補部のみが削除領域になるというのは正しい想定であることを支持した。しかし、この提案を採用すれば、非フェイズ主要部の補部の削除はどのように捉えるのかという新たな問題が生じる。この問題を解く手がかりとして、フェイズ性に関して新たな提案を行った Chomsky (2015)を挙げた。Chomsky (2015)は、 $R(V)$ から v^* への主要部移動が生じる場合には、 v^* が不可視的になり、その代わりに $R(V)$ のコピーにフェイズ性が移行すると提案している。この提案を拡張し、TがCに主要部移動する場合には、Cが持つフェイズ性はTへと移行すると想定し、非フェイズ主要部の補部が削除される場合には、フェイズ性が非フェイズ主要部へと移行し、その結果、一見非フェイズ主要部の補部の削除ではあるが、実際にはフェイズ主要部の補部の削除であるという結論を導いた。更に、本論文の帰結として、日本語では一致がないため、TP指定部とTの間の照合でTの補部が削除されることはないことを示した。また、もう一つの認可の可能性として、E素性を持つ主要部を選択する主要部が焦点を持つ場合には、削除が認可される事が予測されるが、これについても予測通りである事を実証した。さらに、第6章の最後には、フェイズ主要部ではないとされていた弱フェイズのフェイズ性についても考察を行った。受け身および非対格構文ではvは非フェイズであるためE素性を持つことはできない。しかし、動詞句削除において態のミスマッチが可能であるという事実により、態を司るvが削除されずに残らなければならない。そのため、TがE素性を持ち、その補部を削除するという分析ではこの現象を捉えられない。これを解決するため、Legate (2003)のvもまたフェイズ主要部であるという提案を採用し、これにより態のミスマッチを適切に説明することができることを論じた。

最後に、第7章では、これまでの議論を総括し、削除はフェイズの補部に対してのみ生じるという提案が正しいことを改めて示した。また、本分析により、省略現象は特別な現象ではなくE素性という素性を想定するだけで、極小性理論の枠組みにおいて統一的に捉えることができるということを実証し、これにより本論文が削除現象の観点から生成文法理論の発展に貢献するものであることを論じた。